

【講演3】南武蔵・相模における加曽利E式「古い部分」 ～その細別観点と表記について～

黒尾和久

スライド1 群馬県草津町の国立重監房資料館に勤務しています黒尾和久です。よろしくお願いします。

スライド2 1986年3月に東洋大学に提出した私の修士論文の図版の1枚です。加曽利北貝塚の報告をもとに堅穴住居跡の所産時期を色別で示しています。「加曽利E I式」は赤、「加曽利E II式」は青ですね。貝層下に多くの堅穴が埋没していて、なおかつ同時期で数多く重複しています。「加曽利貝塚は縄文集落として日本一のポテンシャルをもつのだ」と、お世話になった後藤和民さんの熱弁も聴きました。そのムラの景観に迫るには、加曽利E式をひとつとっても、まだまだ編年細分研究が必要であることを、この図は示しています。私が中期土器編年研究や集落研究を志した動機の一つに、確かに加曽利貝塚があったと思います。懐かしいし、今回のシンポジウムのパネラーで呼んでもらえたことは非常に光栄です。

スライド3～5 関東各地で、加曽利貝塚と同じ形成プロセスをもつ中期の「環状集落跡」が確認されています。貝層形成の有無はありますが、千葉県姥山貝塚と群馬県三原田遺跡は「相似形」の「環状集落跡」でしょう。私が報告に関わった東京都八王子市宇津木台D地区もそうです。東京都調布市原山遺跡では、ちょうど堅穴が集中する場所に「のぞき窓」をあける調査区を設定しています。内陸部の宇津木台Dも原山も三原田遺跡同様に貝層こそ形成されていませんが、廃棄物である土器・石器・礫等と堅穴住居跡の集中域が重複して検出されます。加曽利貝塚や姥山貝塚の平面図も同じものだと考えられます。なぜこのような形で「集落遺跡」が残されるのか、その一時的な景観に迫るためにも、形成プロセスに接近するためにも、土器による「時間のモノサシ」作りを進める必要があるのです。

スライド6 私に与えられたテーマは、加曽利E式の「古い部分」（「最も古い部分」＝加曽利E 1式、「古い部分」＝加曽利E 2式）の編年研究についてです。私の調査フィールドである南武蔵が中心のお話になります。1970年代以降の加曽利E式の編年研究は、武蔵・相模を中心に進められました。それは皆さんご存じのように、加曽利E式の文様帯の消長に着目したものでした。しかし、それは加曽利E式の編年研究のパイオニア・山内清男の分類観点とは異なるものなのです（加曽利E式編年対照表を参照）。

スライド7～18 山内清男の『先史土器図譜』（以下、『図譜』）には、加曽利E式の編年の急所が、簡潔ですが、的確に書かれています。まず加曽利E式の分布域は関東一円に広がりますが、「最も古い部分」のあり方は一様ではないことに注目すべきです。『図譜』には、その地域差が意識された常陸・下総・武蔵の標本が選択されています。大事になるのは、「体部の文様」に関する記載で、「最も古い部分」（加曽利E 1式）は、「縄紋のみのものがあるが、隆線の文様あるもの、沈線の文様あるものもある」、それに続く「真の加曽利E地点の土器の大多数および下総上本郷E地点の土器」（古い部分：加曽利E 2式）は、「体部の文様は沈線のみであり、縄紋も斜行するのみで、縦行するもの（例えば81の如きもの：スライド13）を含んで居ない」と説明されていることです。斜行および縦行縄紋そして、胴部は縄紋のみ、隆線あるもの、沈線あるものまでであるという多様な「加曽利E 1式」の胴部文様から、斜行縄紋と沈線の胴部文様に統一される「加曽利E 2式」への変化として説明されているのです。

この時、武蔵における「最も古い部分」は、1970年代以降の調査成果を顧みても明らかなように、「縦行する縄紋」（撚糸文）が卓越して成立し、それに隆線の文様があるもの、さらには頸部無文帯があるものが主体を占めて変遷する地域性をもっていました。つまり胴部文様要素が隆線から沈線へと変化するあり方で、加曽利E 1式とE 2式を明確に区分できる地域が武蔵であるという幸運がありました。

南武蔵における加曽利E 1式の胴部文様は、撚糸文（Y）→撚糸文+隆線（Y+r）→斜行縄文（C+r）と小区分されて、加曽利E 2式の胴部文様である斜行縄文+沈線（C+t）へと変遷するわけです。ちなみに加曽利E 3式は胴部文様への磨消縄文の採用（C+s）で画されることとなります。

スライド19～40 それでは、具体的に多摩地域の調査事例を紹介しながら、南武蔵における加曽利E式の「古い部分」を中心とした加曽利E式の編年細分について示してみましょ。中心とした資料は、中山真治さんと一緒にまとめた『新編小金井市史』の成果をベースにした小金井市中山谷遺跡の事例です。ここでは加曽利E 1式からE 2式の編年細分について説明しています。スライドをごらんください。

続いて八王子市宇津木台D地区や調布市原山遺跡、羽村市山根坂上遺跡の事例で、加曽利E 2式における連弧文土器出現の様相について簡単に説明、「新地平編年」（多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文中期の時期設定）の加曽利E 1～E 3式（新地平10a～12c期）の編年表を添えています。ご理解をいただきましたでしょうか。

スライド41～43 最後に私の作成した「加曽利E式編年対照表」と予稿集5ページに用意された「加曽利E式土器の細分基準の違い」を再び示しました。後者には、予稿集で欠けていた「新地平編年」の細別記号を補っています。加曽利E式編年には、アラビア数字とローマ数字の二者があるという研究の混乱があります。私は、『先史土器図譜』に示された方針に従いアラビア数字を採用する立場にあります。

そして加曽利E式の成立の範囲についても関東一円に広くとり、「最も古い部分」（加曽利E 1式）の地域差が、「古い部分」（加曽利E 2式）で解消され、胴部文様要素に磨消縄紋の一般化をもって「新しい部分」（加曽利E 3式）が成立するという考え方に従います。その意味において「分類基準の違い」に示されたローマ数字の加曽利E I式とE II式の境も磨消縄紋の有無であり、私はその整理でいいと思います。

ただし、「編年対照表」や米田明訓氏の「対象表」をみると明らかですが、文様帯の消長に着目した場合には、頸部無文帯の有無で区分されることになり、表記の区分線にずれが生じます。文様帯編年をアラビア数字にした「読み替え編年」もあり、なかなか複雑です。このシンポジウムでも表記が異なる不便を皆さんも感じたかもしれませんね。もちろん、それぞれが対照可能ならばいいのかもしれませんが、頸部無文帯をもつ土器群も、広域に展開する加曽利E式にあってローカルな様相の現れなのです。文様帯編年は武蔵・相模では好適でも、頸部無文帯の土器が存在しない地域での利用には不都合が生じるというわけです。加曽利E式の関東一円の広域な成立を踏まえて、まずは山内の示した方針に従い文様要素に着目した編年を各地域で確立して、地域間の交差を行うというのが上策だと思います。私が研究フィールドとした南武蔵と加曽利E式が命名された下総との編年対比も古くて新しい課題です。

スライド44 そんな向後の加曽利E式の研究進展に思いをはせるならば、過去100年の加曽利貝塚の加曽利E式土器の再整理作業も必須ですし、これからの100年の加曽利貝塚の調査研究をどう展望してゆくのかも大いに議論されるべきでしょう。加曽利E式の研究を新たなステージにあげる機は熟しているのではないのでしょうか。今回のシンポジウムも道程にある一里塚です。ご静聴ありがとうございました。

2024（令和6）年度
加曾利貝塚E地点・B地点
発掘100周年記念シンポジウム

「加曾利E式土器の再検討」

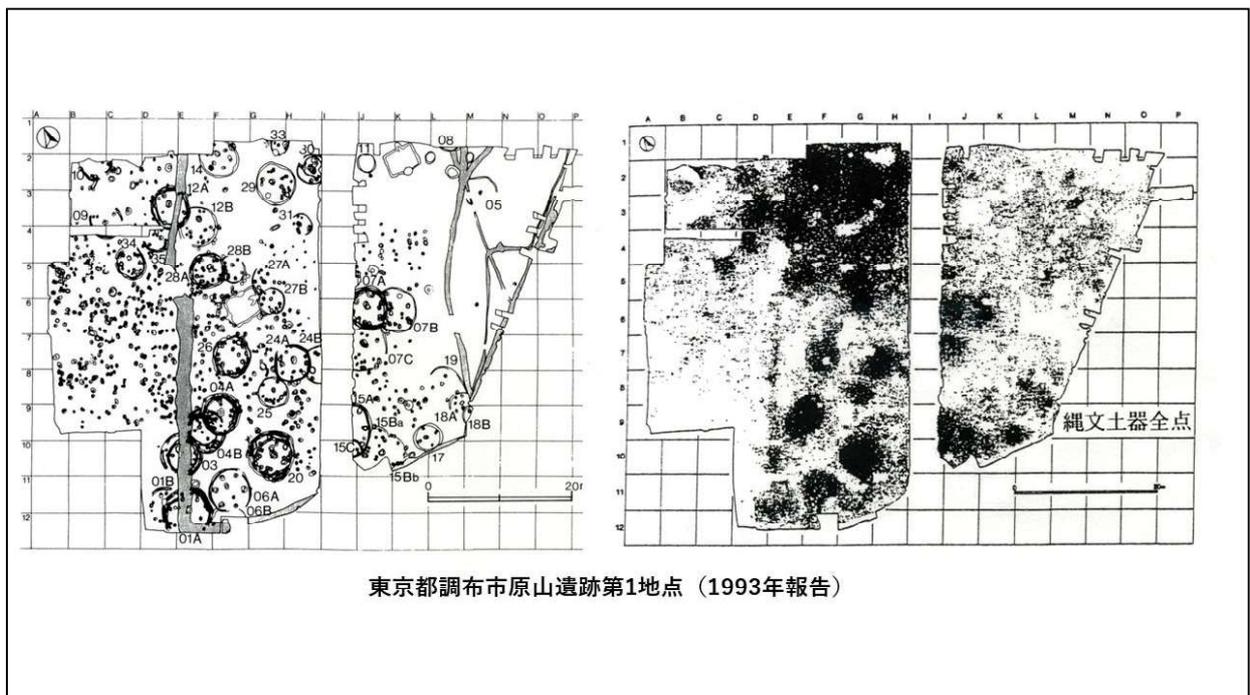
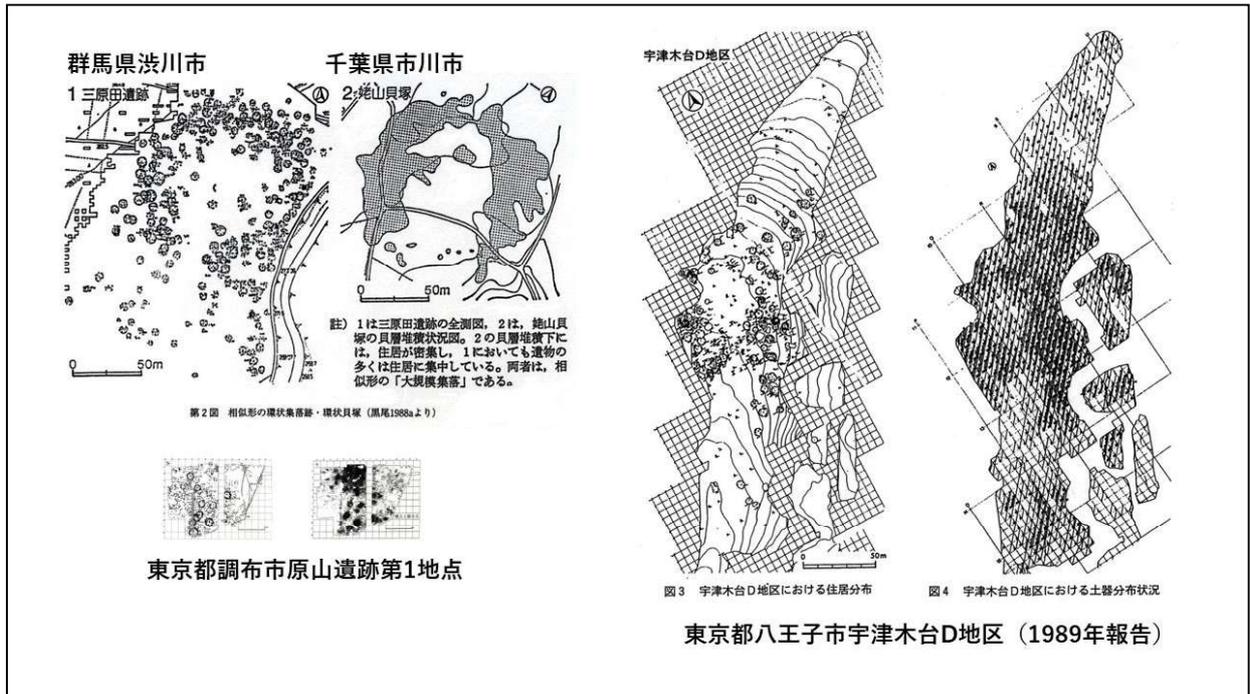
南武蔵・相模における
加曾利E式「古い部分」
～その細別観点と表記について～

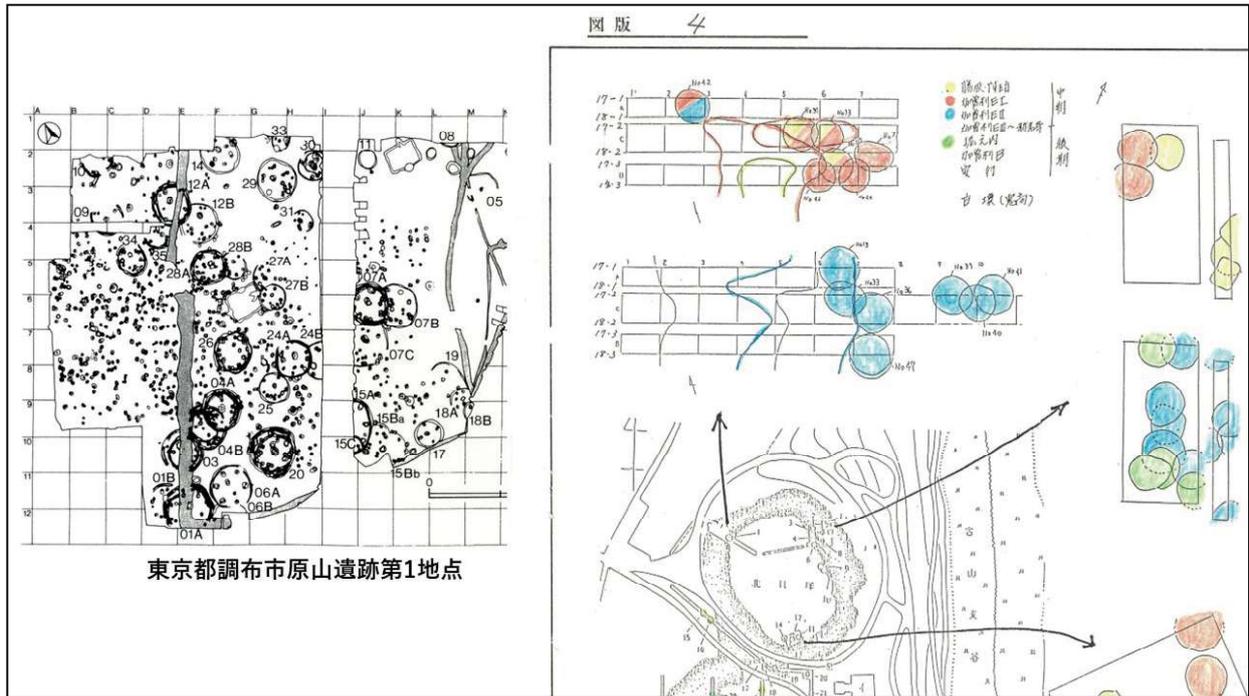
黒尾和久
(国立重監房資料館)

図版 4

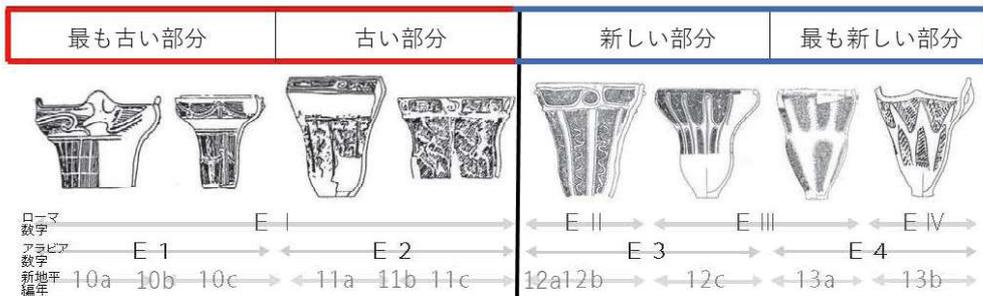
遺跡分布図 本館 住居発掘区

加曾利貝塚遺跡





黒尾 (1995)	新地平 (1995)	山内 (1940) 『日本先史土器図譜』	山内 (1969)	山内 (1979)	新藤 (1975) (1976)	谷井 (1974)	谷井 (1978)	谷井 (2001)	能登 (1975)	戸田 (1976) (1977)	鈴木 (1981)	安孫子 他 (1980)						
E1	1a	10a	古い部分	E1	隆線をつける	E I a	E I 前	E I 前	E1	E1	E1	I						
	1b	10b				最も古い部分	E I b [古]						E I 中	E I 後	E2	E2	E2	II
	1c	10c				E I b [新]	E I 後						E I 後	E I 前	E3古	E3	III	
E2	2a	11a	新しい部分	E2	沈線を加える (標本83)	[+]	[+]	E I 後 葉直後	E2	E3	E3	IV						
	2b	11b				E II	E II 前						E II 中	E3新	V			
	2c	11c				E II 後	E II 前						E II 後	E4古	VI			
E3	3a	12a	新しい部分	E3	磨消 縄文 の手法	E II	E II 前	E II 後	E4	E4	E4	VII						
	3b	12b				E III	E II 後						E4新					
E4	4	13a・b	最も新しい部分	E4		E III	E IV											



山内清男：加曾利E式「古い部分」の解説

①「細別のうち最も古い部分」（加曾利E 1式）については、「口縁部に突起把手が多く、口頸部の隆線文様がこれに関連して発達して居る（80～82参照＝筆者レジュメの第1～3図）。**体部の文様帯には縄紋のみのものがあるが、隆線の文様あるもの、沈線の文様あるものもある**」と説明。

②「最も古い部分」に続く「真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器」（加曾利E 2式）は、「口縁部に突起殆ど無く、**体部の文様は沈線のみであり、縄紋も斜行するのみで、縦行するもの（例えば81の如きもの＝筆者レジュメの第2図）を含んで居ない**」と解説。

→ちなみに「新しい部分」（加曾利E 3式）の成立は、「**体部の文様帯のうちに縄紋の抹消が一般化**」（磨消縄文）と解説。

山内清男：加曾利E式「古い部分」の解説

①「細別のうち最も古い部分」（加曾利E 1式）については、「口縁部に突起把手が多く、口頸部の隆線文様がこれに関連して発達して居る（80～82参照＝筆者レジュメの第1～3図）。**体部の文様帯には縄紋のみのものがあるが、隆線の文様あるもの、沈線の文様あるものもある**」と説明。

「最も古い部分」で紹介された土器は、
加曾利E式の地理上の範囲（→下野・上野は??）と、それ以上に成立期の地域差がおそらく強烈に意識されていて、
「常陸」「下総」「武蔵」の土器が紹介されている。







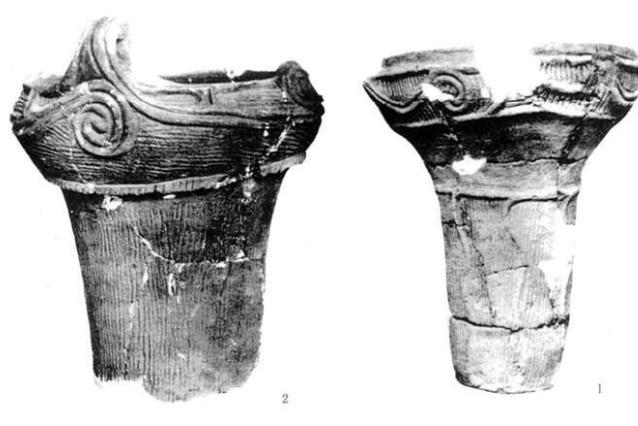
山内清男：加曾利E式「古い部分」の解説

①「細別のうち最も古い部分」(加曾利E 1式)については、「口縁部に突起把手が多く、口頸部の隆線文様がこれに関連して発達して居る(80~82参照=筆者レジユメの第1~3図)。体部の文様帯には縄紋のみのもがあるが、**隆線の文様あるもの、沈線の文様あるものもある**」と説明。

→武蔵の土器は、**縦行する縄文(撚糸文)、隆線の文様あるもの**そして**頸部無文帯がある土器である。**

②「最も古い部分」に続く「真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器」(加曾利E 2式)は、「口縁部に突起殆ど無く、**体部の文様は沈線のみであり、縄紋も斜行するのみで、縦行するもの(例えば81の如きもの=筆者レジユメの第2図)を含んで居ない**」と解説。

「先史土器図譜」掲載の武蔵出土の加曾利E式

<p>最も古い部分 (加曾利E1式)</p> 	<p>古い部分 加曾利E2式</p> <p>真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器</p> <p>資料掲載なし</p>	<p>新しい部分 (加曾利E3式)</p>  <p>磨消縄文</p>
<p>加曾利E I 式 (ローマ数字)</p>	<p>加曾利E II 式 (ローマ数字)</p>	

「先史土器図譜」掲載の武蔵出土の加曾利E式

<p>最も古い部分 (加曾利E1式)</p>  <p>縦行縄文 (撚糸文) Y</p> <p>縦行縄文 (撚糸文) + 隆線 Y + r</p>	<p>古い部分 加曾利E2式</p> <p>真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器</p> <p>斜行縄文 + 沈線 C + t</p>	<p>新しい部分 (加曾利E3式)</p>  <p>磨消縄文 C + s</p>
<p>加曾利E I 式 (ローマ数字)</p>	<p>加曾利E II 式 (ローマ数字)</p>	

黒尾 (1995)	新地平 (1995)	山内 (1940) 『日本先史土器図譜』	山内 (1969)	山内 (1979)	新藤 (1975) (1976)	谷井 (1974)	谷井 (1978)	谷井 (2001)	能登 (1975)	戸田 (1976) (1977)	鈴木 (1981)	安孫子 他 (1980)		
E1	1a	10a	最も古い部分	古い部分	E1	隆線をつける	E I a	E I 前	E I 前 E I 後	E1	E1	E1	I	
	1b	10b					E I b [古]	E I 中		E2	E2	E2	II	
	1c	10c					真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器	E I b [新]					E I 後	E I 後
E2	2a	11a	E2	沈線を加える (標本83)	[+]	[+]		E I 後 葉直後	E2 前 E2 中 E2 後	E3	E3古	E3	E3	IV
	2b	11b			E II	E II 前 E II 後		E II 前			E3新			V
	2c	11c			新しい部分	新しい部分	E3	磨消文の手法			E III			E III
E3	3a	12a	E4	E4					E4	E4	E4	E4	E4新	VII
	3b	12b												
	3c	12c												
E4	4	13a・b	最も新しい部分											

「先史土器図譜」解説→縄紋（斜行・縦行）のみ、隆線・沈線文様の土器

加曾利 E 1 式（最も古い部分）

武蔵の土器は、撚糸文（Y）

撚糸文 + 隆線（Y + r）と頸部無文帯

加曾利 E 2 式（古い部分）：斜行縄紋と沈線文様の土器に絞られる

斜行縄文 + 沈線（C + t）

黒尾 (1995)	新地平 (1995)	山内 (1940) 『日本先史土器図譜』	山内 (1969)	山内 (1979)	新藤 (1975) (1976)	谷井 (1974)	谷井 (1978)	谷井 (2001)	能登 (1975)	戸田 (1976) (1977)	鈴木 (1981)	安孫子 他 (1980)			
E1	1a	10a	最も古い部分	古い部分	E1	隆線をつける	E I a	E I 前	E I 前 E I 後	E1	E1	E1	I		
	1b	10b					E I b [古]	E I 中		E2	E2	E2	II		
	1c	10c					真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器	E I b [新]					E I 後	E I 後	III
E2	2a	11a	E2	沈線を加える (標本83)	[+]	[+]		E I 後 葉直後	E2 前 E2 中 E2 後	E3	E3古	E3	E3	IV	
	2b	11b			E II	E II 前 E II 後		E II 前			E3新			V	
	2c	11c			新しい部分	新しい部分	E3	磨消文の手法			E III			E III	E III
E3	3a	12a	E4	E4					E4	E4	E4	E4	E4	E4新	VII
	3b	12b													
	3c	12c													
E4	4	13a・b	最も新しい部分												

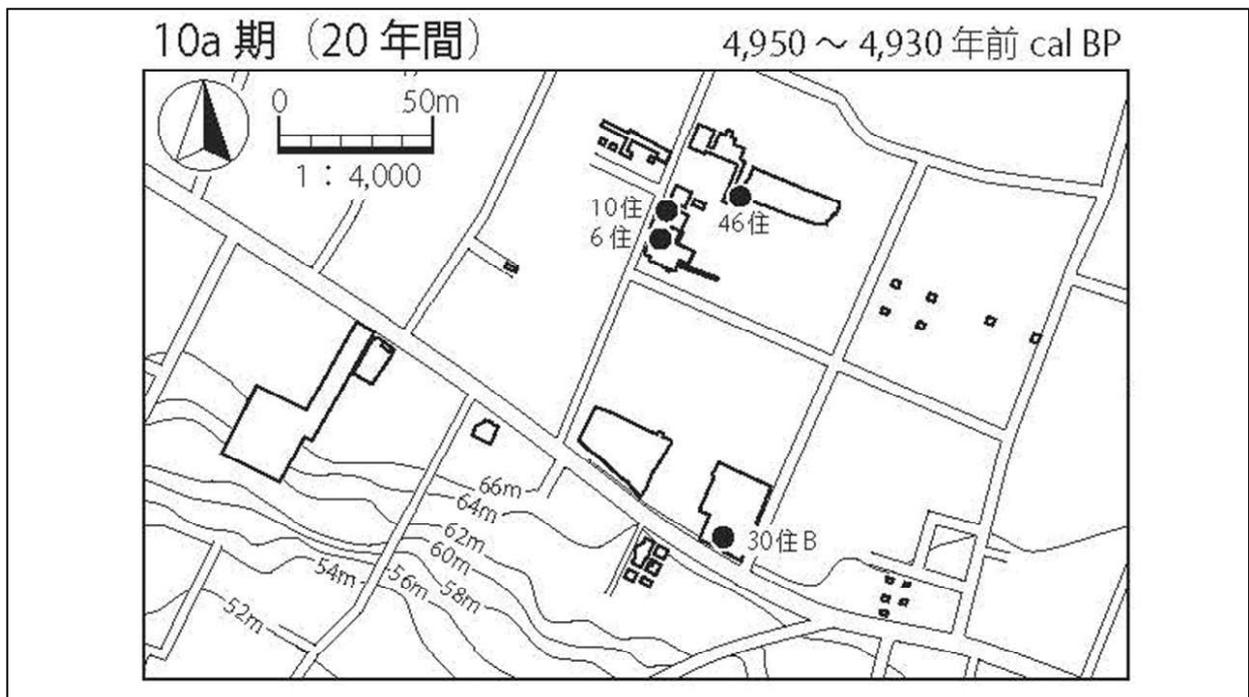
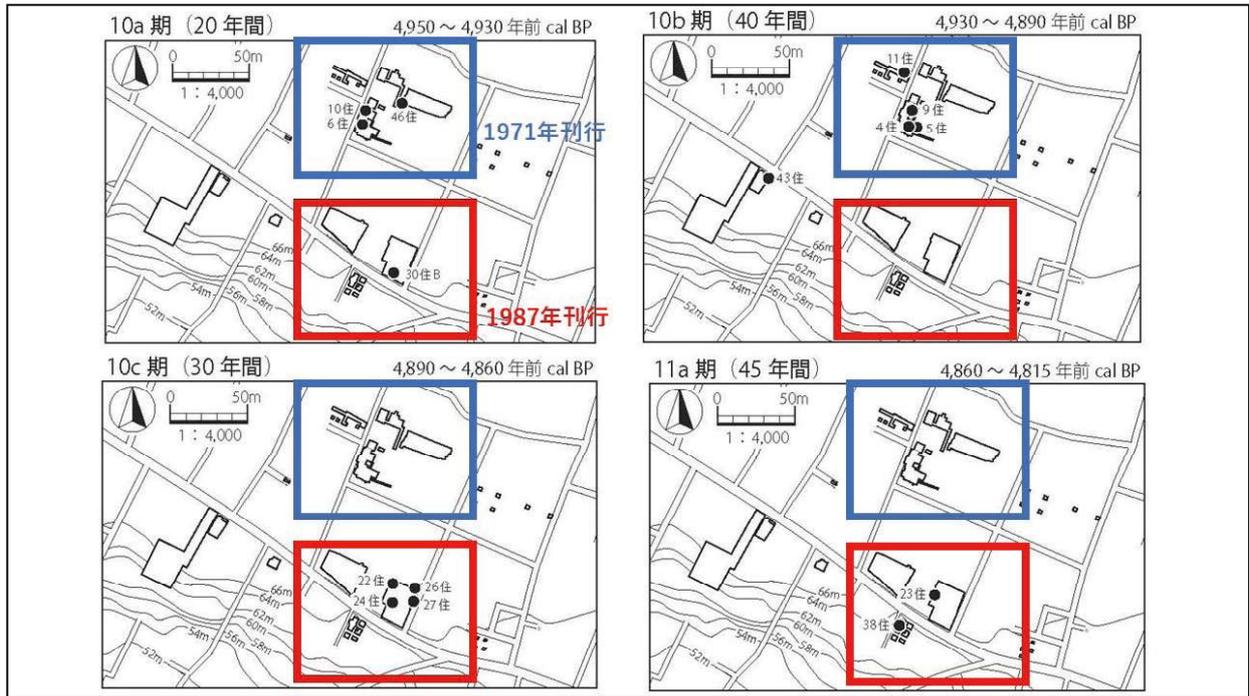


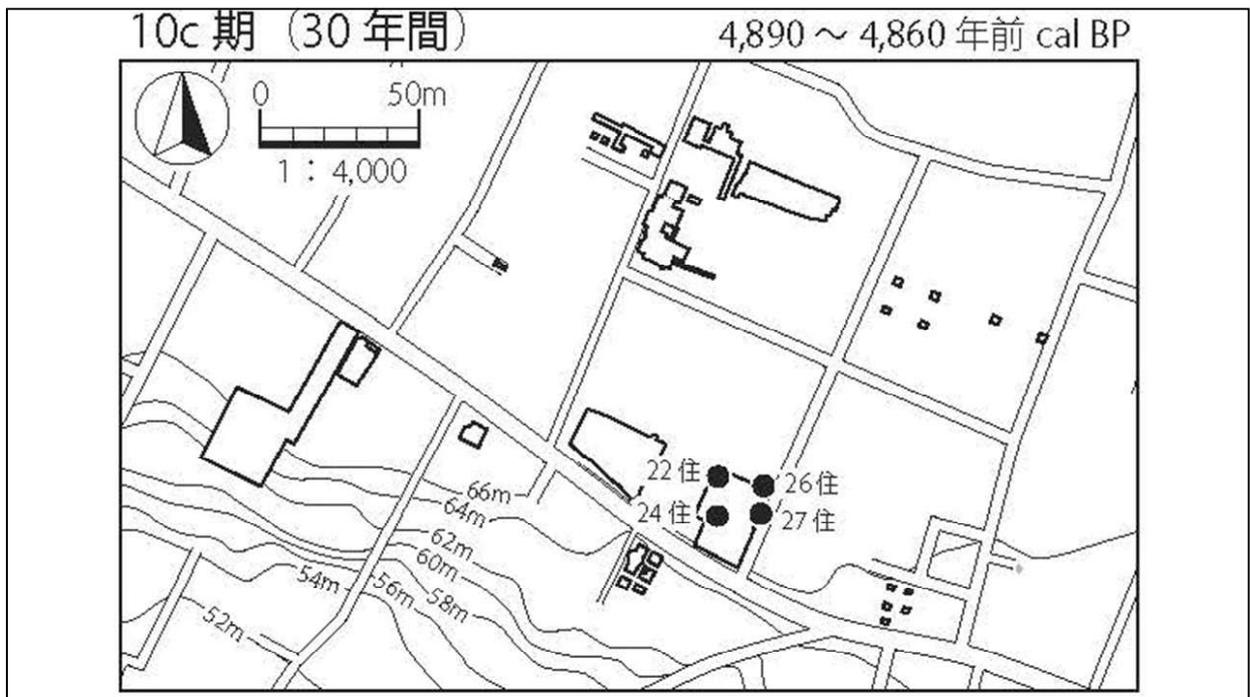
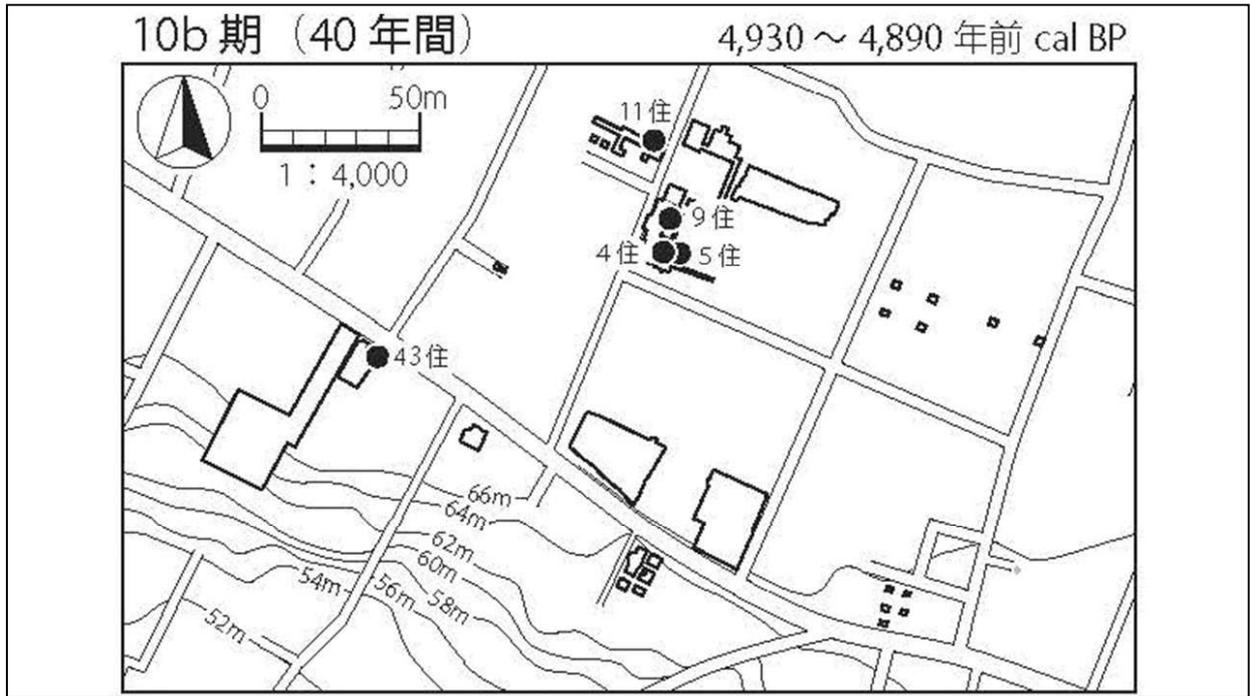


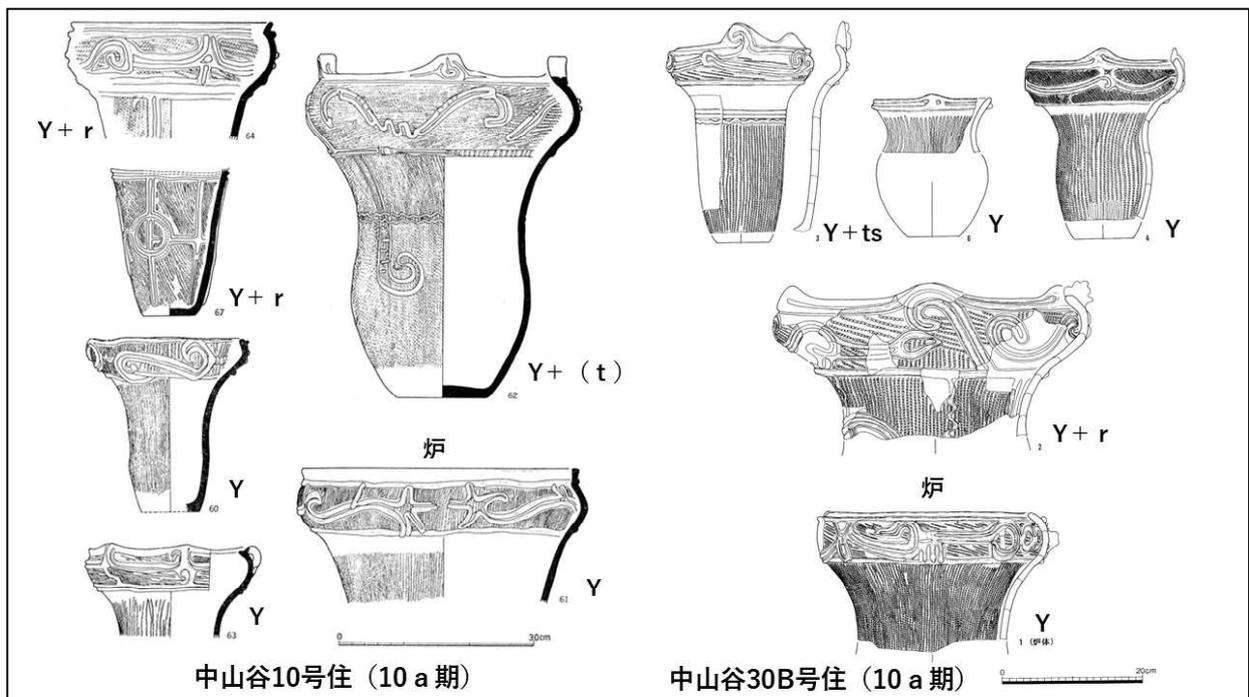
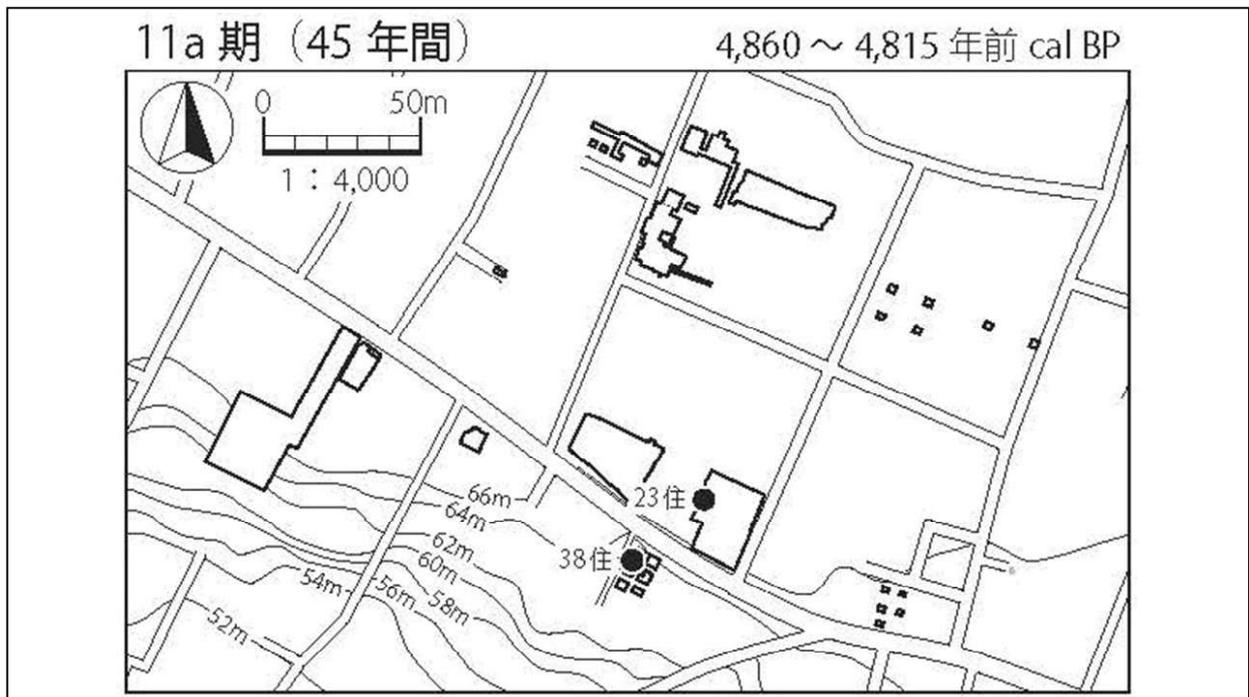
表4-5 中山谷遺跡住居変遷表

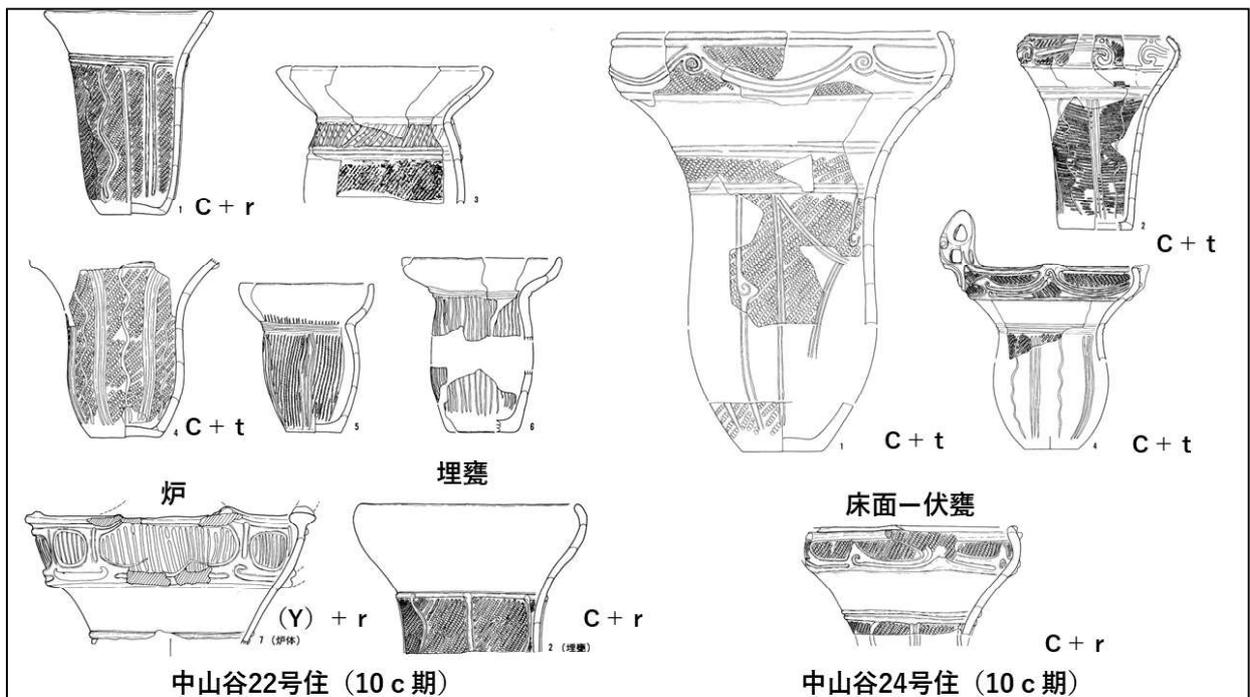
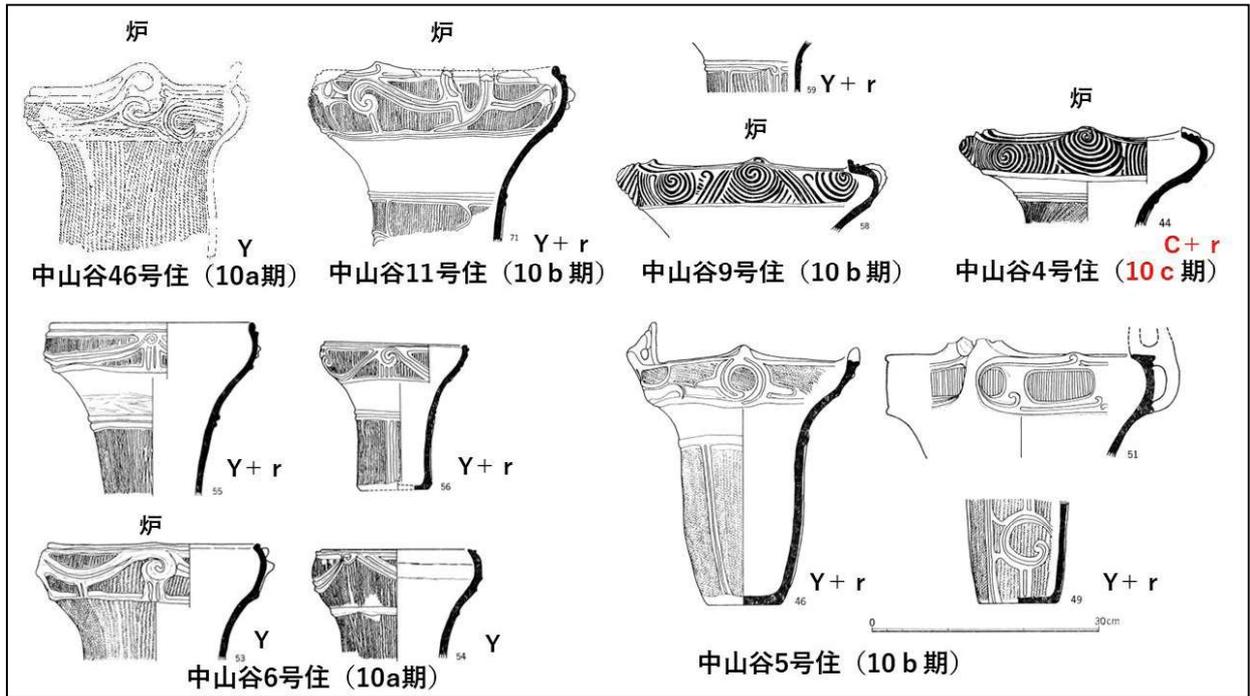
時期	中期前半(勝坂式期)							中期後半・末葉(加曾利E式期)						時期不明
	第Ⅰ期		第Ⅱ期		第Ⅲ期			第Ⅳ期			第Ⅴ期	第Ⅵ期	第Ⅶ期	
	7a期	7b期	8a期	8b期	9a期	9b期	9c期	10a期	10b期	10c期	11a期	12期	13b期	
A群 (北)	8住 7住		45住 47住	16住 2住	15住	17住 13住	3住	46住 10住	11住 9住					14住 12住
			18住		1住	4住=5住								
B群 (西)	40住		21住	41住	42住	20住	19住B 19住A	1971年刊行						
								43住						
C群 (東)	29住	33住		39住		34住		24住		23住			25住	35住
	30住A 28住		31住	37住	32住		30住B		22住 26住		38住			44住 36住
合計	3	3	6	4	7	5		3	6	4	2		2	4

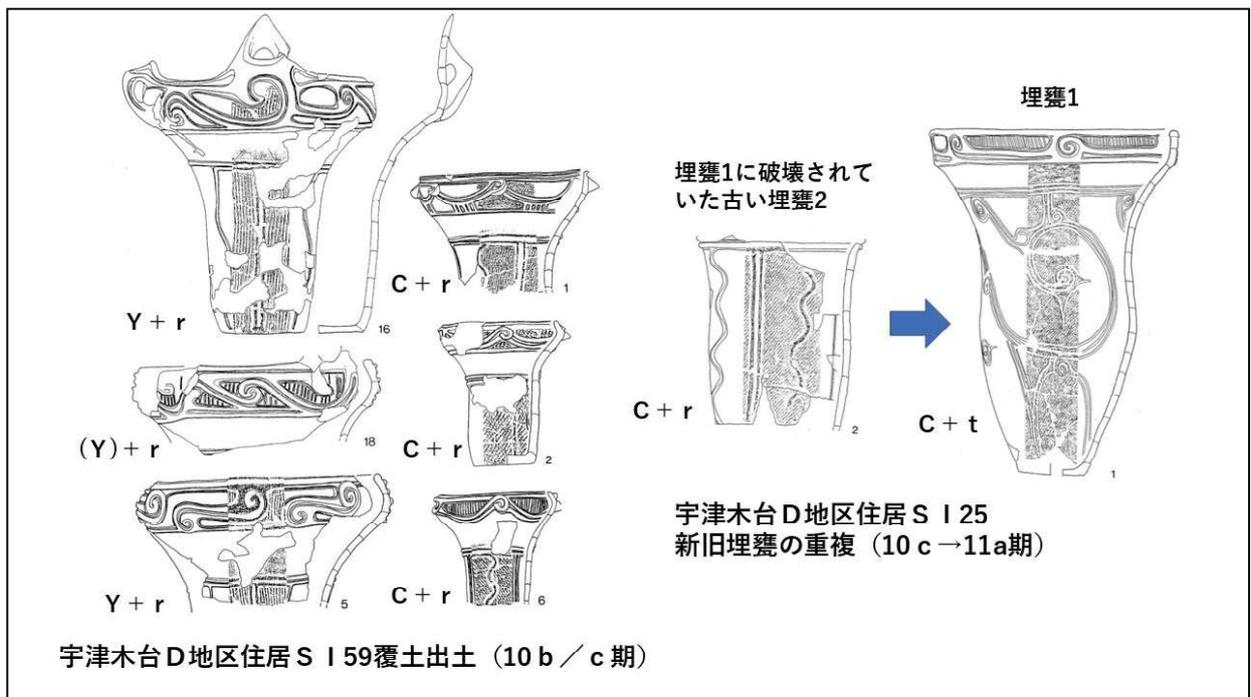
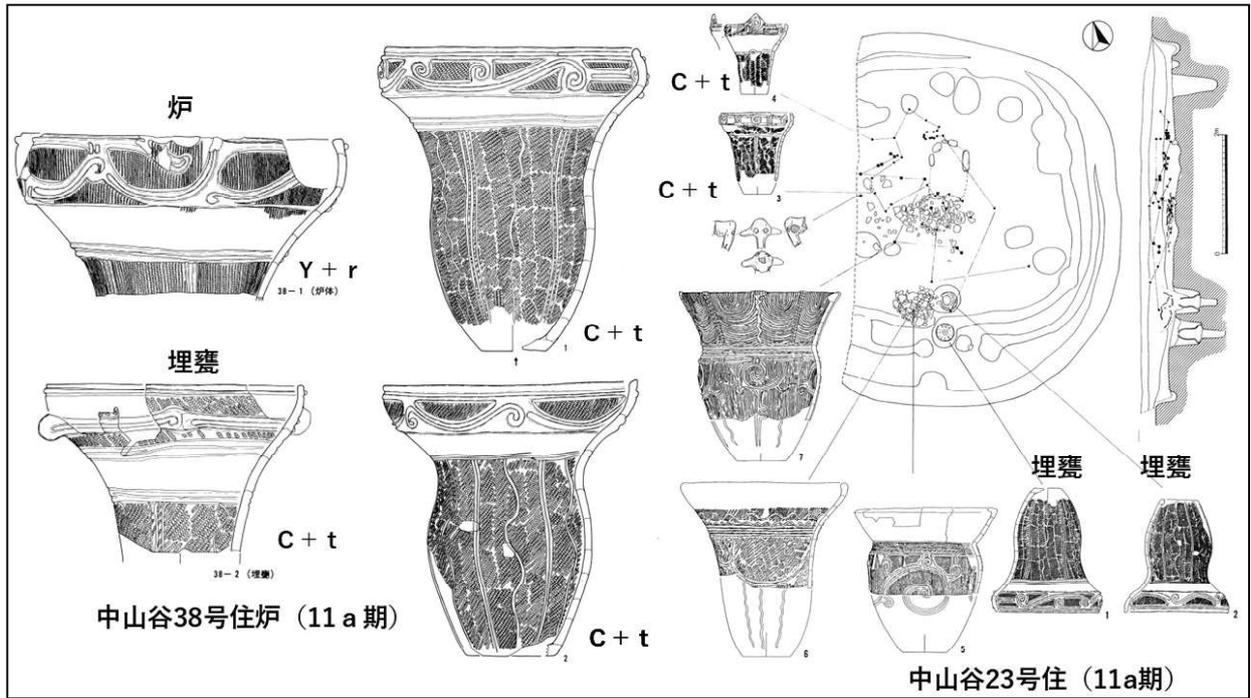
—— 住居跡の重複関係

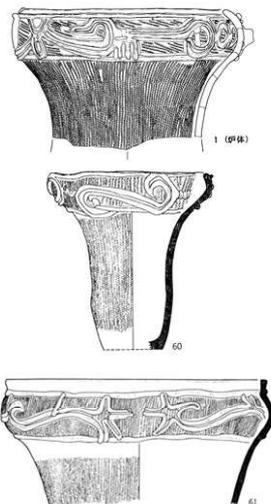
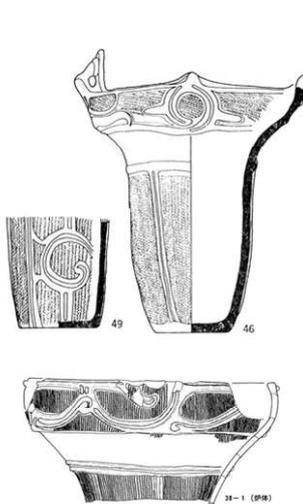
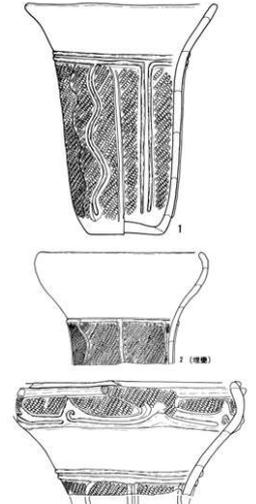
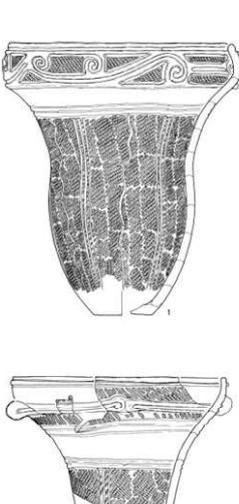


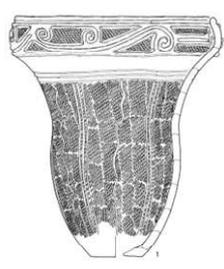


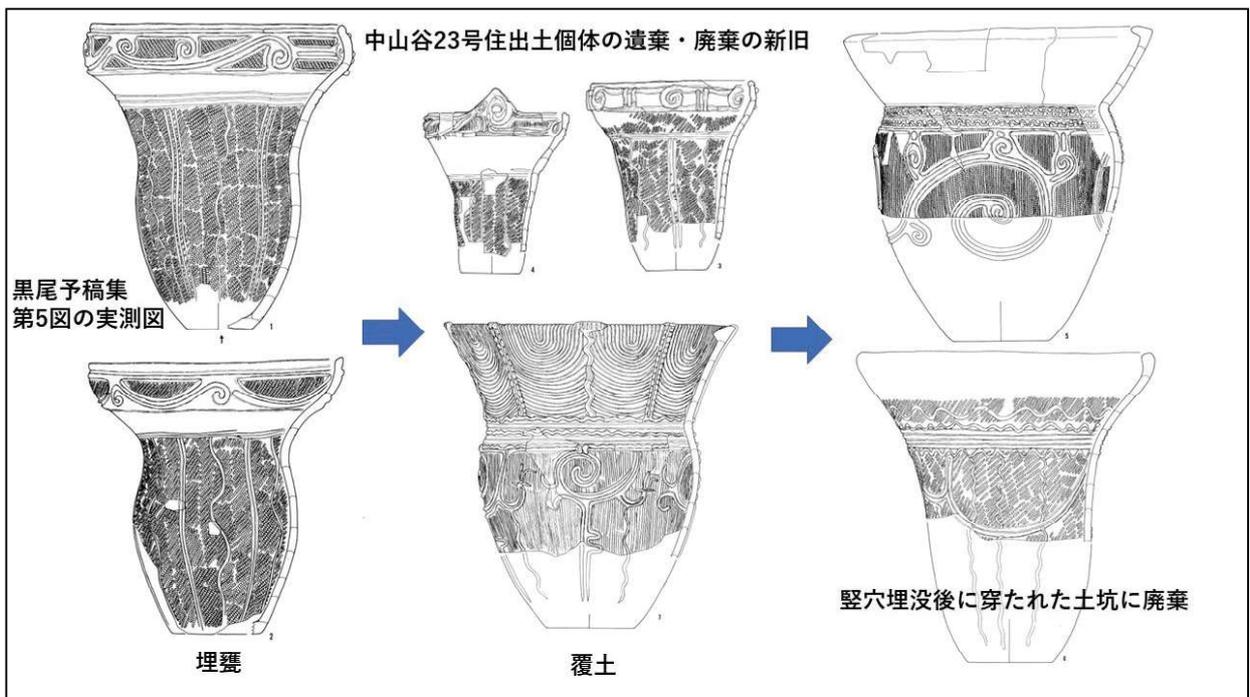


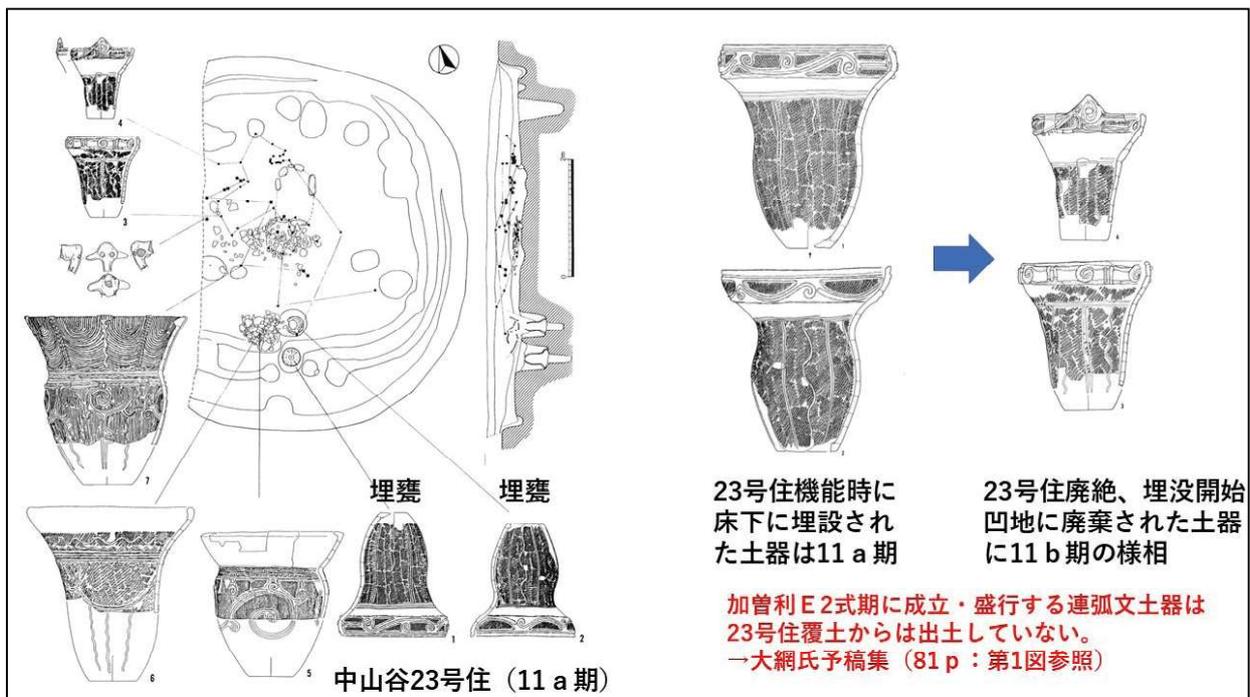
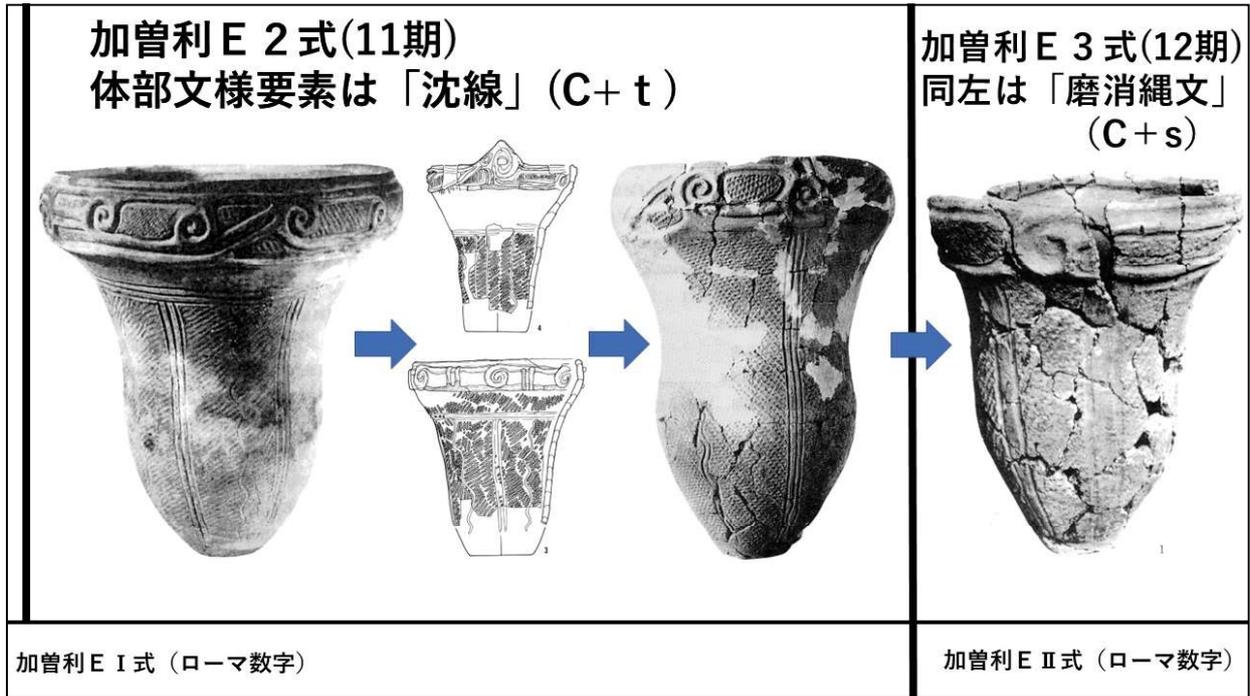


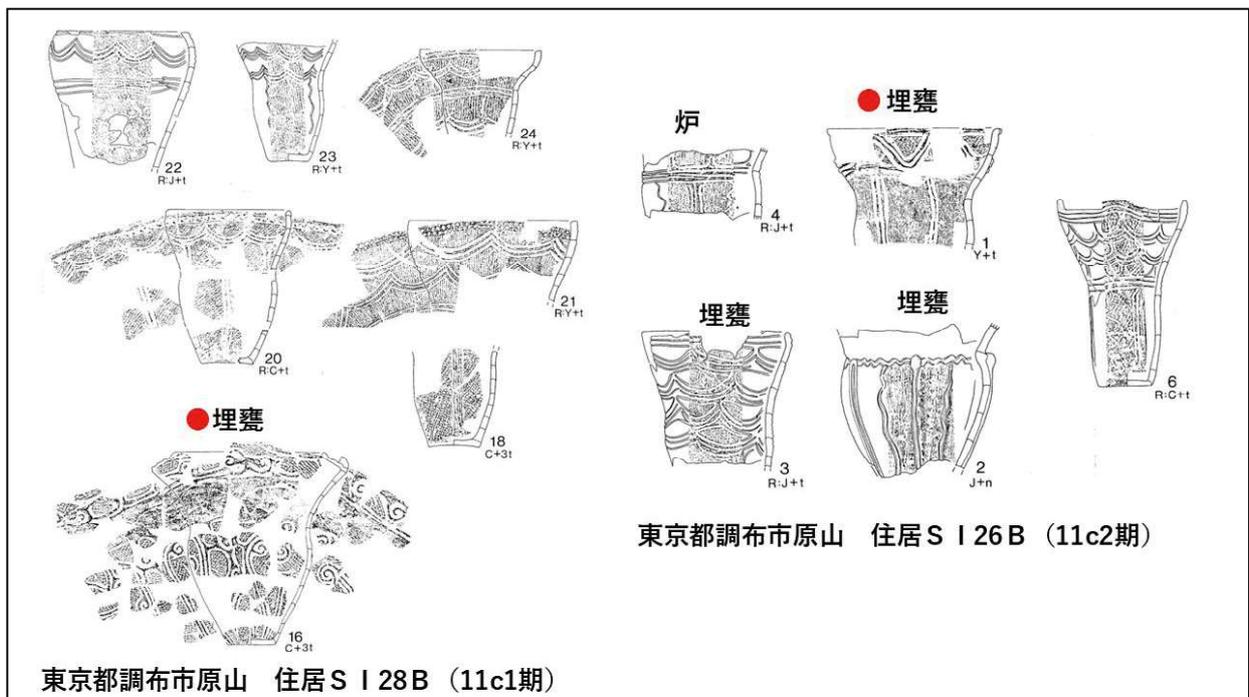
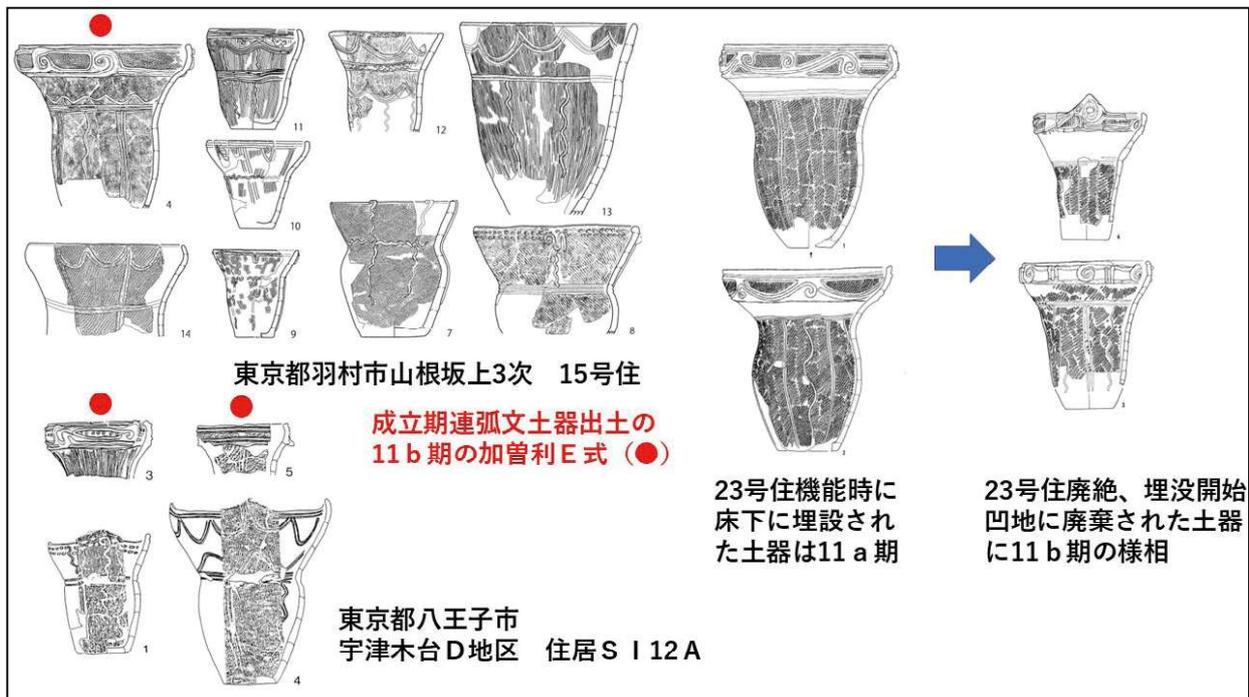


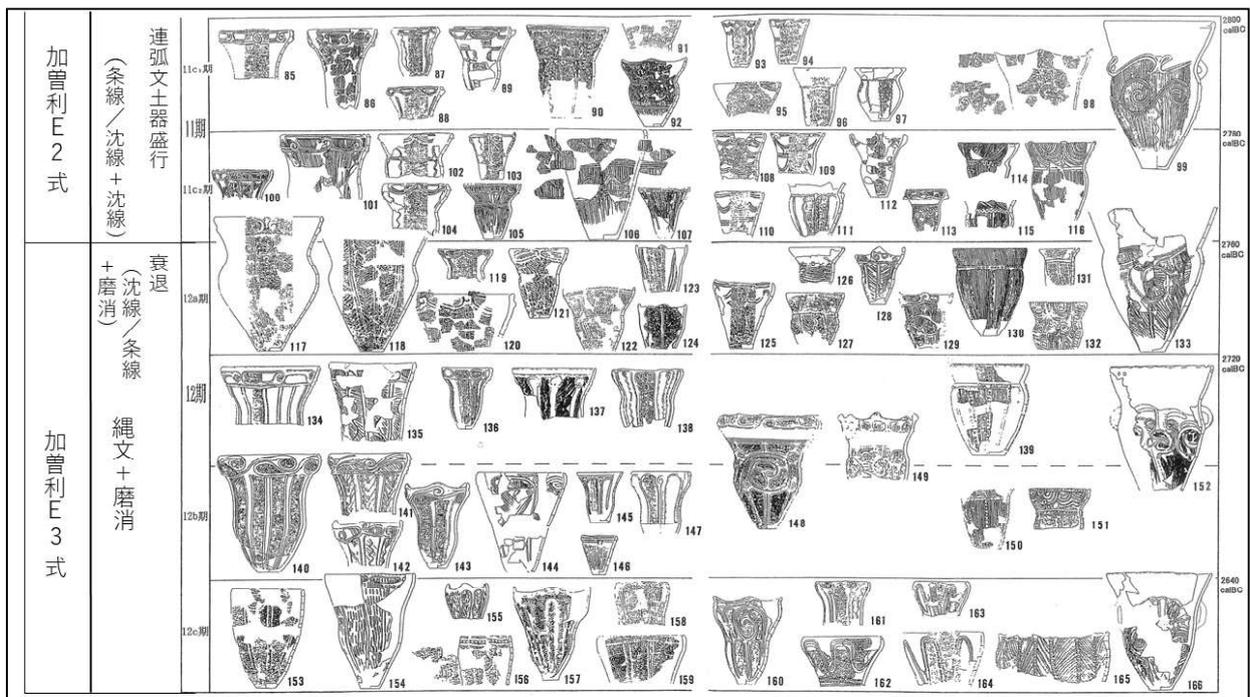
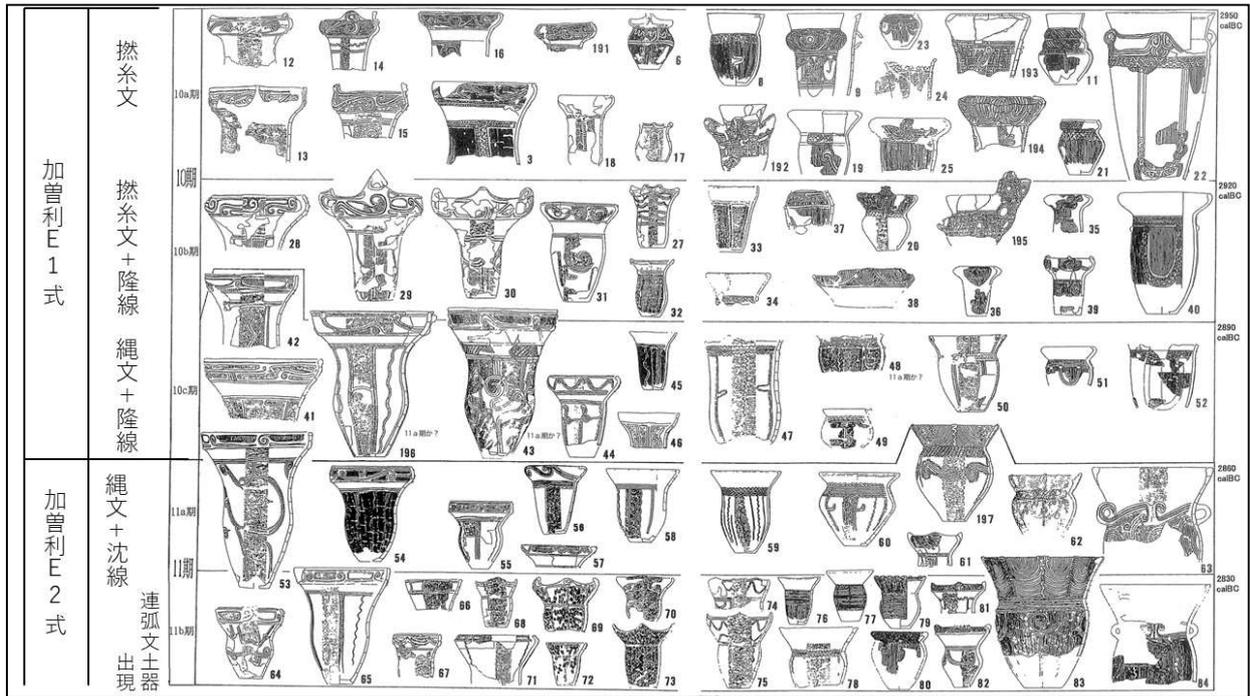
加曾利E1 a 式 (10a期)	加曾利E1 b 式 (10 b 期)	加曾利E1 c 式 (10 c 期)	加曾利E2 a 式 (11 a 期)
			
撚糸文(Y)	撚糸文+隆線(Y+r)	縄文+隆線(C+r)	縄文+沈線(C+t)

武蔵出土の加曾利 E 1 式の細分				
最も古い部分 (加曾利 E 1 式)			古い部分 (加曾利 E 2 式)	新しい部分 (加曾利 E 3 式)
10 a 期	10 b 期	10 c 期	11 期	12 期
				
撚糸文(Y)	撚糸文+隆線 (Y+r)	縄文+隆線 (C+r)	縄文+沈線 (C+t)	縄文+磨消 (C+s)



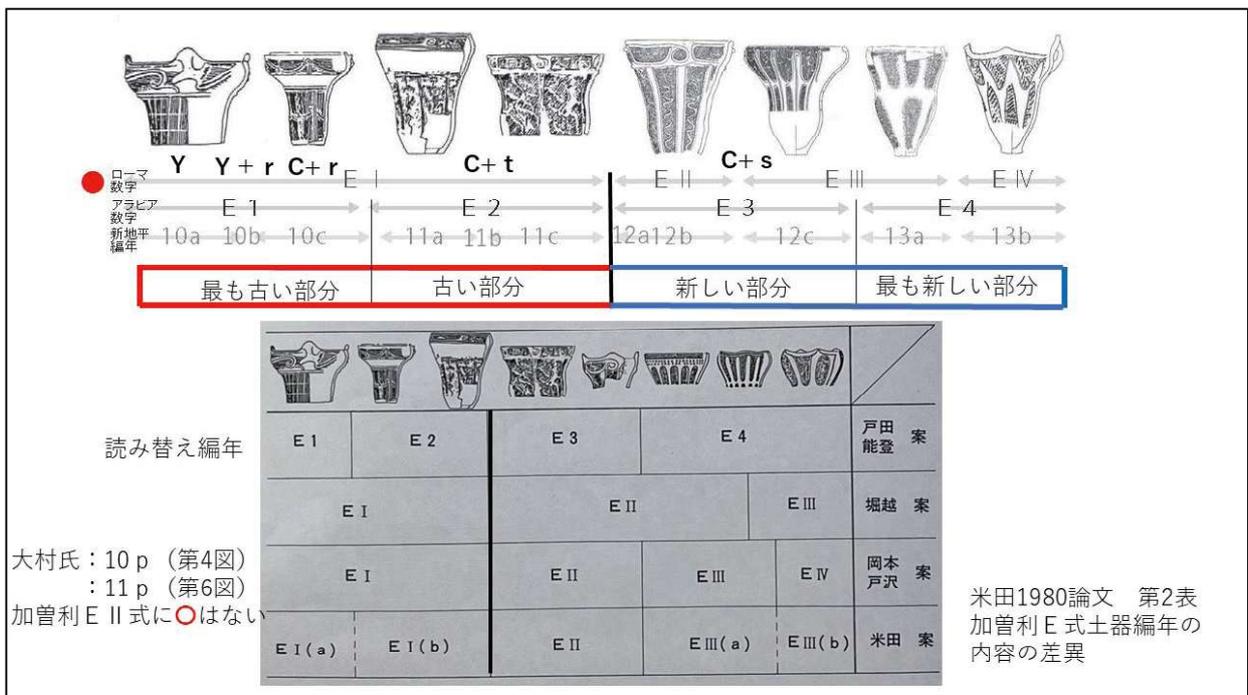
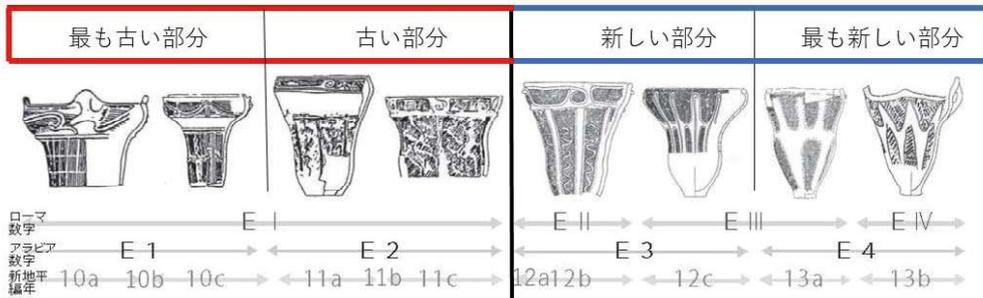






【講演3】南武蔵・相模における加曾利E式「古い部分」
黒尾和久

黒尾 (1995)	新地平 (1995)	山内 (1940) 『日本先史土器図譜』	山内 (1969)	山内 (1979)	新藤 (1975) (1976)	谷井 (1974)	谷井 (1978)	谷井 (2001)	能登 (1975)	戸田 (1976) (1977)	鈴木 (1981)	安孫子 他 (1980)	
E1	1a	10a	最も古い部分	古い部分	E1	隆線をつける	E I a	E I 前	E I 前 E I 後	E1	E1	E1	I
	1b	10b					E I b 〔古〕	E I 中		E2	E2	E2	II
	1c	10c					E I b 〔新〕	E I 後					III
E2	2a	11a	真の加曾利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器	E2	沈線を加える (標本83)	[+]	[+]	E I 後 乗直後	E II 前	E3	E3古 E3新	E3	IV
	2b	11b				[+]	[+]	E II 中	IV				
	2c	11c				[+]	[+]	E II 後	IV				
E3	3a	12a	新しい部分	新しい部分	E3	磨消文の手法	E II	E II 前	E II 前 E II 後	E4	E4古 E4新	E4	V
	3b	12b					E II 後	V					
	3c	12c					E III	VI					
E4	4	13a・b	最も新しい部分	E4	E4	E4	E IV						VII



黒尾 (1995)	新地平 (1995)	山内 (1940) 『日本先史土器図譜』	山内 (1969)	山内 (1979)	新藤 (1975) (1976)	谷井 (1974)	谷井 (1978)	谷井 (2001)	能登 (1975)	戸田 (1976) (1977)	鈴木 (1981)	安孫子 他 (1980)									
E1	1a	10a	最も古い部分	古い部分	E1	陰線を つける	E I a	E I 前	E I 前	E1	E1	E1	I								
	1b	10b												E I b 〔古〕	E I 中	E I 後	E2	E2	E2	II	
	1c	10c												E I b 〔新〕	E I 後	E I 後	E2	E2	E2	III	
E2	2a	11a	真の加曽利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器	新しい部分	E2	沈線を 加える (標本83)	〔+〕	〔+〕	E I 後 柔直後	E II 前	E3	E3古	E3	IV							
	2b	11b													E II	E II 前	E II 前	E3	E3新	E3	V
	2c	11c													E III	E II 後	E II 後	E4	E4古	E4	VI
E3	3a	12a	新しい部分	新しい部分	E3	磨 消 文 の 手 法	E III	E III	E II 後	E II 後	E4	E4新	E4	VII							
	3b	12b													E4	E4	E4	E4			
E4	4	13a・b	最も新しい部分	新しい部分	E4																

E I	E 2	E 3	E 4	戸田 能登 案
E I		E II		堀越 案
E I		E II	E III	岡本 戸沢 案
E I (a)	E I (b)	E II	E III (a) E III (b)	米田 案

読み替え編年

米田1980論文 第2表
加曽利E式土器編年の
内容の差異

2024 (令和6) 年度
加曽利貝塚E地点・B地点
発掘100周年記念シンポジウム

「加曽利E式土器の再検討」

南武蔵・相模における
加曽利E式「古い部分」
～その細別観点と表記について～

ご静聴ありがとうございました。

黒尾和久
(国立重監房資料館)

0 5-1/2000 100m